

レファレンス  
余 話

口頭、電話、文書を問わず、仏教の經典についての問い合わせが最近多くなっている。特に、文書による仏典についての質問は解答作成に多くの時間を要する。例えば、『般若経』内のある一章節の所収部分を問われた場合は煩雑な検索を覚悟しなければならない。そこで、まず最初に問い合わせの文を熟読含味して、その熟語と要旨から、經典類の索引類を検索し、『大般若波羅蜜多經』(600巻)の分別品中の一節であろうという見当をつける。そして、『大正新脩大藏經』第5～6巻の分別品の項の一字一句を照合する作業を開始する。その場合、問い合わせ文中の字画の少ない漢字：一、二、三、……あるいは一切とか、不二とかいう文字に注目し、その分別品の中の漢字を一瞥する。即ち、漢文中の余白の部分がよく目立つからである。すると、類似した意味の漢字が列んでいることに気付く場合がある。しかし、少し違う。今まで検索していた『大般若経』は玄奘訳のものであった。一般に『般若経』といわれる經典には主なものに『金剛般若波羅蜜經』があり、同經典は上記『大般若経』の要点を記したものとされている。そして、また、その要旨をまとめた經典が『摩訶般若波羅蜜多心經』であるといわれる。俗稱『般若心經』は告別式、法事等で読誦するので、問い合わせ文ではないことが判り、従って、『金剛般若経』の一節ではないかという見当をつけて、今度は『大正藏』第8巻の同經の分別の項を検索する。検索の仕方は上記、字画の少ない漢字の方法である。

ここでも問い合わせの經典文に類似した文に出合うが、少々違うようである。今、漠然と検索したものは鳩摩羅什訳である。一般に經典の翻訳ものは彼の訳からという習慣があるためと、彼の漢訳が優れている点にある。彼は古代インド人であるため、原典のサンスクリットに堪能なのはもちろんのこと、漢字にもかなり堪能であったと認められているからである。次に、菩提流支訳の同經典の分別の項を検索する作業を始める。しかし、ここでも類似の文は認められるが、完全には一致しない。続いて、眞諦訳の同經典を検索し、問い合わせの文と一致したのである。乱視になったのではないかと思われるほど、大藏經の漢字を見ての解答は次のような簡単なものである。

お問い合わせの經典文は眞諦訳の『金剛般若波羅蜜經』の中に収められていて、『大正新脩大藏經』第8巻、763頁下段に掲載されています。

以上のような悪戦苦斗の末、解答はできた。しかし、ここでの問題は質問の仕方が聊か曖昧で、核心に触れていない点にある。もし、これが口頭であるなら、質問者の求めている細部までつきつめて、案内や解答をするところであるが、文書ではそれは不可能である。つまり、質問者は『般若経』として質問し、正確な『金剛般若経』と唱っていない点にある。一般に、こうした質問が多い点は解答者泣かせというものである。何故なら、概して『般若経』といわれる經典は『大正新脩大藏經』、『続大藏經』の中に約30典あり、それらの義疏、略疏、注解を数えたなら、恐らく100点以上はあるに違いないからである。

(参考課 長鳴孝行)